

少年野球随想 第十回
「監督稼業」

荒井 義一

「野球の監督と乞食は三日やったらやめられない」という俗諺がある。

古い話で大変恐縮だが、大正時代に今の日本経済新聞の前身である毎朝新聞が、功成り名遂げた、政治家、財界人、文化人三百人に

「今度、生まれ変わったら何になりたいか」というアンケートを出した。

百%近い回収率でその中で圧倒的に多かったのが次の三つだそうだ。

連合艦隊司令長官

オーケストラの指揮者

そして野球の監督である。

この三つに共通するものは「絶対者」であるということである。

「絶対者」を三省堂の辞典でひくと

「何ものにも異存せず、何ものにも制約されない者、例えば神……」と書いてある。

女には解らないが、男と生まれたらナポレオンのように全軍を指揮したいという願望があるのである。

*

少年野球の監督は中学、高校、大学、ノンプロ、プロの監督とちょっと違うところがある。という話を書く。

数年前の話だが総武線の車中で高校時代の野球部の後輩と偶然、出会った。

「やあ、先輩お久しぶりです。風の便りに聞

くところによると少年野球の監督をやっていらつしゃるとか……」

「ああ、そうだよ。」

「うらやましいですね。出来たらもう一度少年野球の監督をやってみたい。私は中学も、高校でも監督をやりましたが、少年野球が一番、やり甲斐がありました……」

「なぜ……」

「子どももコーチも、お母さんたちもみんな真剣ですし、雑用を全部やらなくてはならない。中学や高校は楽ですよ。回りがみんなお膳立てしてくれますからね……」
「例えば練習試合の申し込みは誰がやるの」

「マネージャーです。事前にメモを渡されます。某月某日、何時に校門前集合、相手は 高校、時間通り集合場所へ行くのみな整列して待っています。主将が今日の欠席は誰々と報告しすぐ出発。国府台の坂を下り駅へ行くと、マネージャーが切符を買って待っています。京成に乗ると監督だけ座り、居眠りしていればいいのです。少年野球はそうはいきませんものね。子どもたちを座らせ、監督はつり革にぶら下がり全員に目を光らせていなくてはならない。ボールは持ったか、バットは持ったか、忘れものはないか、大変といえば大変ですけど……」

*

彼は秋葉原で乗り換える時、こう言いな

がら降りて行った。

「勝てば選手が誉められ、負ければ監督はくそみそに言われる。どっちに転んでも割りの合わない稼業ですけど、そこがいいのですよねえ・・・だから、先輩はいつまでもやっているでしょう。」

監督は監督を知る。である。

でも優勝すれば監督を真っ先に胴上げしてくれる。ナインたちも監督のキモチを解っているのである。

この感激は絶対に、銭、金で買えるものではない。

だから、野球の監督は“三日やったら、やめられない”のである。

(平成十八年五月二日脱稿)



春季大会初優勝 (8期生)